

セミナー

「聞き書き」ともちいた地域づくりの可能性」

名古屋市立大学大学院人間文化研究所
課題研究科目「グローバル社会と地域文化」

佐野 直子



宮内泰介さん

二〇一四年
二月三日（土）、
課題研究科
目「グローバル社会

と地域文化」主催、「まちづくり」に資する参加型質的調査方法の開発」（科研費・挑戦的萌芽研究、代表・宮内泰介）共催にて、セミナー「聞き書き」をもちいた地域づくりの可能性」が開催された。本セミナーは、「グローバル社会と地域文化」が主催してきたセミナーの第一〇回にあたる。今回は、昨年まで本課題研究科目のメンバーであった一橋大学の赤嶺淳さんが参加している挑戦的萌芽研究とのジョイント企画として、特に「聞き書き」という手法に焦点をあて、北は北海道、南は奄美諸島までの非常に多彩な発表者をお

呼びしての拡大セミナーとなり、教室が満員になる九〇余名の方にご来場いただいた。参加者の一人であった人文社会学部国際文化学科二年生の高部美里さんの報告レポートをもとに、セミナーの概要と意義を報告したい。

「聞き書き」とは、単純に言えば「人の話を聞いて書く」という手法である。ただそれだけのことではあるが、その効果や意義に多くの人が気づき始めており、宮内泰介さんによれば、全国各地、海外でもさまざまな取り組みが行われている、という。

聞き書きによってできることは、まず何よりも「記録すること」である。全国から集まる一〇〇人の高校生によって毎年実施されている「聞き書き甲子園」を実施している「共存の森ネットワーク」事務局長の吉野奈保子さんによ



吉野奈保子さん

する活動を「本」として刊行することを目的とした活動を行っている。奄美諸島では、妖怪ケムムンを代表とするような豊かな伝承

ば、この「聞き書き甲子園」では、高校生がさまざまな地域で自然と共に生きてきた「名人」を訪ね、一対一での聞き書きを行っている。それは、従来書かれることなかった「名人」が持つ知恵、技、そしてその暮らしそのものを記録して残すことである。また、岐阜県中津川を拠点としたNPO法人山里文化研究所代表の清藤奈津子さんは、岐阜県とその周辺に、「名もなき山里（さと）人」に対しての聞き書きを「本」として刊行することを目的とした活動を行っている。奄美諸島では、妖怪ケムムンを代表とするような豊かな伝承



清藤奈津子さん

が奄美のこ
とばととも
に失われつ
つある。奄
美群島文化
財保護対策
連絡協議会

の中山清美さんたちは、「奄美遺産」を記録し、伝えていこうとするさまざまな試み（ケムムン出没場所地図作成など）をおこなっている。

しかし、聞き書きの意義は単に記録するだけではない。世代や場所を超えて人と人がつながるといふ効果も生み出している。

聞き書きするにあたり大切なことは、わかつたつもりになってはいけないということである。相手の話すこと、そして相手のことに興味を持たなければ、語り手ももっと話してくれるような質問ができない。語り手から話を引き出し、読み手が疑似体験できるようなディテールを書いていくことが重要である、と吉野さんは言う。そして、聞くことを通して知り、知ってしまったら動かすには無理がない。「聞き書き甲子園」を経験した高校生たちは、その後も「名人」の暮らしをとおこなったり、歴代の

「聞き書き甲子園」参加者同士のつながりも生まれたりしているという。清藤さんによれば、聞き書きとは「名もなき山里(さと)人」と「名もなき都市(まち)人」とがつながることである。「よそ者」が聞き書きをすることで、地元の人びとが気づかなかった地域の魅力が明らかになる。そして、その聞き書きの本が読まれることで、あらたなつながりも生まれることになるだろう。

今回のセミナーの大きな成果は、大学関係者だけでなく、琵琶湖博物館、山梨県の日本上流文化圏研究所や山崎川グリーンマップなどのNPO、また、今年から「タカハマ!まるごと宝箱」という聞き書きプロジェクトに取り組む高浜市長を始めとした高浜市民の方々など、それぞれ地域の中で興味深い活動を行っている方々にご参加いただけたことである。当日は発表者の方々が関わってきた出版物や、本課題研究科目が刊行して

けられたが、短い休み時間にはそのコーナーに人だかりができ、山里文化研究所の多彩な刊行物は完売となった。清藤さんは「こんなに売れたのは初めてです」と驚いていらつしやり、参加者の関心の高さを伺わせた。

「自由討論」の時間は、聞き書きの手法の多様さ、成果の発信方法、誰が誰に聞くのか、どのような「ことば」で聞き／書くのか、聞き手と語り手で発表したい内容がずれた場合どうするのか、といったさまざまな問題が提示された。時間がおしてしまつて十分に議論を深められなかったことが反省点であるが、セミナー後には懇親会が行われ、四〇名ほどの方にご参加いただけた。宮内泰介さんが長年とりくんでいる「聞き書き」の成果刊行物の配布、お互いの活動の紹介や情報交換、さまざまな活動をやっていくにあつての相談など、非常に活発な交流の場となった。これもまた、「聞き書き」が作り上げる人のつながりの一つであるといえるだろう。

実施して痛感したことは、地域に大学が「貢献」できる、という視点にどこか「おごり」が含まれている、ということだ。名古屋市立大学で聞き書きの実践を長年取り組んできた赤嶺淳さんが、その発表で最初に口にしたのは、その反省の弁であった。生活の中で育まれてきた知恵や技、生きざまとしての哲学を伝えてくれるのは、名もなき名人たちであり、そして、その知恵を受けつぎ、書き残し、多くの人びとへとつないでいこうとする試みも、すでに地域の中で蓄積されている。四年で卒業していく学生を次々に送り出さなくてはならない大学が、継続的な取り組みをおこなうことの困難や、大学生が大挙して小さな自治体に押ししかけることの負担という問題もある。隠岐郡海士町で「一〇〇人への聞き書き」をめざして始めた「おきひやく」プロジェクトは、当該地域でも非常に注目される取り組みとなったが、さまざまな事情から、今年度、一九人目まで聞き書きした『海士伝③』の刊行後は、現スタイルでの継続は困難になった。大学教育と「地域づくり」との関わりは、安易に「大学の地域貢献」などとは言えない問題をはらんでいる。

赤嶺さんの友人が口にしたという「地域の大学貢献」とは、学生も大学教員も、地域からさまざまな知恵や技を教えていただく側にあり、地域のネットワークの中で、大学生、大学教員、そして大学そのものを育てていただくものだ、という態度を示している。「知」は大学の専売特許ではない。その当たり前のことをもう一度問い直し、暮らしの中で息づいてきた、いかなれば小文字の「知」を、どのように大学に接続させていただけののか、従来学校など通過しなくても引きつがれてきた「知」を、大文字の「知」として奪ってきってしまった学校教育の場で、どのように小文字の「知」と大文字の「知」を結び合わせることができるのか。本セミナーは、今後の課題をつきつけると同時に、さまざまな活動をしている人びとが集まり、問題点と同時に可能性も議論し、つながっていく「場」を作るといふ、大学の使命を示唆するものともなった。



中山清美さん

きたブックレット「グローバル社会を歩く」シリーズの販売コーナーがもう